

14年ぶりの狂犬病発症について

静岡県立静岡がんセンター 感染症内科 倉井華子
静岡厚生病院 小児科 田中 敏博

2020年5月、国内で14年ぶりに狂犬病の症例が報告されました¹⁾。その前は2006年に2例発症があり、1例を担当しましたが、これ以上辛い病気は経験がありません。発症すれば100%死亡します。国内ではまれな疾患ですが、世界ではアジア・アフリカを中心に発生し、毎年55,000人以上が亡くなっていると推定されます。²⁾

発症すれば治療はなく、予防につきます。海外では動物をなでないこと、近づかないことなど指導が必要です。またリスクが高い地域や行動(洞窟に入ったり秘境ツアーに行くなど)をする場合は積極的に渡航前ワクチンをすすめましょう。

狂犬病ワクチンは、動物に咬まれる前に接種する曝露前予防、咬まれた後に接種する曝露後予防があります。咬まれたら打てばいいと考える方もいますが、顔面など頭に近い場所を咬まれた場合は曝露後接種を開始しても発症した症例があります。現在、国内で手に入るのは、KM バイオロジクス³⁾の製造する組織培養不活化狂犬病ワクチンと、2019年3月に承認されたGSKの製造する狂犬病ワクチン(商品名ラビピュール)の2つです。それぞれ接種方法が異なるため、表1にまとめました。これを見ると、接種方法がだいぶ違うことがわかんと思います。組織培養不活化ワクチンの場合、添付文書通りで行くと渡航の半年以上前から接種をしなければなりません。狂犬病蔓延国に行く方の中にはバックパッカーも多く、そんな前から予定を立てませんよね！ただ国産の組織培養不活化狂犬病ワクチンでも、WHO方式(ラビピュールの使用法)で十分な抗体価上昇が確認された報告もありますので、急ぐ場合はWHO方式での接種は可能です。³⁾

ラビピュールは海外で製造し輸入するプロセスから、潤沢な在庫というわけではありません。

表1 狂犬病ワクチンの種類と接種方法

	組織培養不活化 狂犬病ワクチン*	ラビピュール 筋注用
製造会社	KMバイオロジクス	GSK
国内承認	国内 1980/6/10	2019/3/26
WHO事前承認	なし	2005/6/22
投与経路	皮下注	筋注
投与量	1.0 ml / 回	1.0 ml / 回
曝露前接種	4週間隔で2回接種、 更に6~12か月後、1回接種	0,7, 21~28日後 各1回接種
曝露後接種	0,3,7,14,30および90日 計6回接種	適切な間隔**で 4~6回接種

* KM バイオロジクスの製品は、2019年9月に在庫消尽をもって欠品になっています。

** 4回接種: 0(接種部位を変えて、2箇所につき1回ずつ、計2回)、7、21日

5回接種: 0、3、7、14、28日、

6回接種 0、3、7、14、30、90日

曝露前予防は、当然ですが、輸入品であろうと国内認可品であろうと、自費診療です。曝露後予防は、国内認可品を用いる場合は、動物咬傷の保険病名で保険診療となります。この場合は、年齢や接種歴によって、やはり保険診療として破傷風トキソイドの接種を併用することもあります。

海外で動物に咬まれたり、ひっかかれたりした場合には、すぐに流水でよく洗い、現地の信頼できる医療機関を受診してください。そして現地の流行状況や曝露リスクを加味し速やかにワクチン接種を開始します。リスク分類は表 2 に示します。カテゴリ 3 の場合は 7 日以内の抗狂犬病ウイルス免疫グロブリンの投与が勧められていますが、なかなか入手ができない場合が多いようです。2 回以上の曝露前接種があれば、カテゴリ 3 でも免疫グロブリン注射は適応とならないため、できる限りリスクが高いかたは渡航前のワクチン接種がおすすめです。

表 2 リスクと曝露後治療

カテゴリ	動物との接触	曝露後予防の推奨
1 曝露なし	傷のない皮膚をなめられた、触った、餌をやった	不要
2 曝露	甘噛み 出血のない引っかき傷	ワクチン接種
3 濃厚曝露	皮膚を超えた咬傷、引っかき傷 創部をなめられた、コウモリ咬傷	ワクチン接種 抗狂犬病ウイルス 免疫グロブリン

カテゴリ 2,3: 咬んだ動物が 10 日間の観察期間後も健康である場合、適切な検査による評価で感染がないことが証明された場合には治療を中止する。

幸い国内では狂犬病は 1950 年代に国内から駆逐されました。ただイヌのワクチン接種率が落ちると、狂犬病の動物が国内に入り込んだ際には、広がる可能性はあるかもしれません。WHO ではイヌのワクチン接種率 70%以上が望ましいとしています。⁴⁾ 今、新型コロナウイルス感染症の影響で動物のワクチン接種率も下がってきています。人のワクチンもですが、ペットのワクチン接種も忘れないようにお願いします。

参考・文献

- 1) https://www.mhlw.go.jp/stf/newpage_11464.html
- 2) <https://www.mhlw.go.jp/bunya/kenkou/kekkaku-kansenshou10/pdf/03.pdf>
- 3) 柳澤 如樹, 国産狂犬病ワクチンを用いた WHO 方式による狂犬病曝露前免疫の検討. 感染症誌 82: 441~444, 2008
- 4) Coleman PG, Dye C. Immunization coverage required to prevent outbreaks of dog rabies. Vaccine. 1996 Feb;14(3):185-6.